



 Data	2025-5
監督：相米慎二	
原作：湯本香樹実	
出演：三國連太郎／坂田直樹／王泰貴／牧野憲一／戸田菜穂／淡島千景／笑福亭鶴瓶	

## 👁️👁️ みどころ

男の子の小6の夏休みは誰でも思い出がいっぱい！ましてや、「死とは何か？」に悩む小6トリオともなれば、おじいさんから聞いた戦争体験談に始まる“ひと夏の経験”の思い出は？

私はキレイなお姉さんが大好きだが、それは小6トリオも同じ。死にかけ(?)の汚いおじいさんは、なぜ妻と離れ離れになったの？日本の某総理と異なり、小6トリオの行動力は一直線で素早い。その結果、たどり着いた介護施設での、あっと驚く物語とは？

『飢餓海峡』(65年)で鬼気迫る熱演を見せた、1923年生まれの名優・三國連太郎の晩年の代表作は『釣りバカ日誌』シリーズ。相米監督演出の本作は、そんな喜劇の出発点となった、老人と子供たちとのひと夏の体験物語！？そう思っていたが、いやいや意外にも、本作は“骨太の反戦映画”！？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■□■鬼才・相米慎二が世界の“SOMAI”として復活！■□■

鬼才・相米慎二監督の死亡は2001年9月9日。1980年から1998年の間に計14作を監督した彼の第13作目が、1994年公開の本作だ。主演を務めるのは、小6トリオの3人と三國連太郎。三國連太郎と聞けば、私はすぐに名作『飢餓海峡』(65年)を思い出す。彼は1923年生まれたから、同作への出演時はまさに全盛期。同作での鬼気迫る演技は王巻だった。他方、2013年に死去する前の彼の晩年のお仕事は、『釣りバカ日記』シリーズへの出演。往年の東宝の社長シリーズにおける森繁久彌を彷彿させる同作における三國の軽妙な演技は、西田敏之との名コンビもあって人気を保ち続けた。

そんな三國連太郎が、鬼才・相米監督とタッグを組んだ本作が1994年に公開されていたことを私は今回初めて知ること。

## ■□■小6トリオが主人公！テーマは彼らのひと夏の経験！■□■

本作の陰の主人公は三國連太郎を演じるおじいさんだが、表の主人公は木山（坂田直樹）、河辺（王泰貴）、山下（牧野憲一）の小6トリオの仲良し3人組だ。山下の祖母が亡くなったものの、“死”というものに実感が持てない3人は、近所の古い家に住む一人暮らしのおじいさんがもうじき死ぬという噂を聞いて興味津々。その結果、「一人暮らしの老人がある日、突然死ぬとどうなると思う？」「ひとりぼっちやろ、死体かて」「やろ、それを発見するねん。おじいさんを見張るんや」との話がまとまると・・・。

”死“という難しいテーマに興味を持つのはいいこと。また、身近なおじいさんをターゲットにして、夏休み中にそれを調べてみようというのもいいことだ。しかし、そうかといって他人の家の中を堀ごしに覗き見るのは如何なもの・・・？道徳的、社会的にはそのとおりだが、映画なら何でもあり、なるほど、鬼才・相米監督の目の付けどころはさすがにシャープだ！

もっとも、ある日、放置されたゴミの山を片付けようと、3人がこっそり庭の中に忍び込むと、「お前ら、ここで何しとるんや。勝手に人の家に入りよって」とおじいさんに叱られたのは当然だが・・・。

## ■□■小6トリオとおじいさんの“共同作業”に注目！■□■

少子高齢化が進み、一人暮らしの老人や老老介護が急増中の日本では、2014年に「空き家対策の推進に関する特別措置法」が成立した。しかし、本作が公開された1994年は不動産バブルが終焉を迎えたばかりの時代だから、舞台を神戸とした本作の住宅地の中にも広い庭を備えた一戸建て平屋住宅があり、そこで一人暮らしをする老人がいたらしい。小6トリオの3人はサッカーの練習もそこそこに、毎日のように堀の上から家の中を偵察していたが、「蚊が多くて窓も開けられん」というおじいさんの一言から、おじいさんと小6トリオの4人による庭の大掃除が始まることに。

おじいさんからの「関取、もっと力を入れなあかんで」「メガネ、根っこから抜くんやで」「ガリ、何もたもたやってるんや」等の容赦ない指示に対して、小6トリオの3人も負けじと憎まれ口を叩きながら、自分の背丈ほどもある草木を引っっこ抜いては運び、懸命に作業を続けていると、いつの間にか4人の間には友情に似た信頼関係が！すっかりきれいになった庭にコスモスの種を植え、美味しいスイカを食べると、4人の達成感と幸せ感は絶頂に！

## ■□■おじいさんの“戦争体験談”から物語は大きく転調！■□■

地球温暖化が進む中、日本では四季が急速に失われつつある。明確に春夏秋冬があった日本の夏の典型的な風物詩は、夕立ち、怪談、高校野球、終戦記念日等等だ。台風は夏を少し過ぎた秋の風物詩だが、本作では台風の日、大雨の中、みんなで植えたコスモスが心配で小3トリオが示し合わせることなくおじいさんの家に集まるところから突然物語が大きく転調していくので、それに注目！

3人の子供たちを前に、おじいさんが語った“戦争体験”とは一体どんなもの？昭和24(1949)年生まれの私は、小学校低学年の頃しばしば母親が語ってくれた(ごく軽微な)戦争体験＝松山での空襲体験談を聞き、またその当時ラジオ放送されていた菊田一夫原作の有名なラジオドラマ『君の名は』を聴きながら、自分なりにその世界を想像していた。しかして、それは、名前が傳法喜八だとわかったおじいさんの戦争体験(＝なぜ、今おじいさんはここで一人住まいをしているの？)(＝なぜ、彼は妻と離れ離れになってしまったの？)を聞いた小6トリオも同じだったらしい。

離れ離れになったという傳法喜八の妻の名前は、古香弥生(淡島千景)。どうにか傳法喜八を古香弥生に再会させてあげられないだろうか？そう考え、古香弥生が入居しているという介護施設を突き止めた3人は、早速大人顔負けの大胆な行動を開始することに……。

### ■□■綺麗な先生に注目！弥生の対応は？3人の更なる奮闘は■□■

小学校高学年の男の子は女の子より成長は遅いものの、性的好奇心を含めて、キレイな先生やキレイな同級生に対して目が向くものだ。本作の主人公たる小6トリオの3人は、一方でサッカーに夢中だし、一方で「死とは何か」という難しいテーマの探究に夢中だが、前半にチラリチラリと姿を見せる近藤静香(戸田菜穂)というキレイなお姉さんが担任だとわかるから、そりゃラッキー。しかし、そんなキレイな女先生が、夏の日、日傘をさし、ノースリーブの淡い色のワンピース姿で傳法喜八の家の周辺をうろついていたのは一体なぜ？また、離れ離れになったという妻の古香弥生が入っている介護施設を突き止めた3人が思い切ってその部屋に入っていくと、そのドアを開けたのが担任の近藤静香先生だったのは一体なぜ？

そこで判明したのは、近藤静香先生は古香弥生の孫だったということ。そのあまりの偶然に小6トリオは驚いたが、当の古香弥生は、「夫の傳法喜八はとうの昔に死んでしまった」と語ったから、アレレ、アレレ？小6トリオが傳法喜八の戦争体験を聞いたところから始まった、おじいさんのための人探しはここで振り出しに戻ってしまったが、小6トリオの更なる奮闘は？

### ■□■本作は反戦映画？喜八の思いは？三國コメントに注目！■□■

2024年から2025年にかけて、NHKスペシャルドラマ『坂の上の雲』(全26回)が再放送されている。私は毎回録画してそれを観ているが、ベストセラーになった司馬遼太郎の人気原作が容易に映画化されなかったのは、一体なぜ？それは、平和憲法の下で「かの大战」を侵略戦争と決めつけた戦後日本の主流派の歴史観が、同原作をある意味で「日露戦争を美化する不届きな文学だ」と決めつけたためだ。

私が同作を読んだのは、大学1回生の夏休みに松山に帰省している最中だったが、一気に読み終えた時の満足感と高揚感は今でもよく覚えている。そして、自分が松山出身であることにこの上ない誇りを抱いたものだ。もっとも、入学直後から、いわゆる「民青系」と呼ばれるセクトで学生運動に熱中していた私は、当然、共産党色が強い学習と活動を続

ける中で、司馬文学への批判もたっぷり聞かされていた。しかし、それはそれ、自分の直感や「いいものはいい」と思う気持ちを変えることはできなかった。

『坂の上の雲』から学んだ私なりの戦争感、歴史観は、今ではしっかり確立しているが、本作が1994年に公開された当時、小学校6年生だった木山君、河辺君、山下君の3人は、傳法喜八の戦争体験談をいかに受け止めた上で、彼が離れ離れになった妻・古香弥生と再会できるようにするため、いかに奮闘したのだろうか？

私は、本作をてつきり、「小6トリオとおじいさんとの微笑ましい一夏の体験物語」だと思っていた。ところが、パンフにある三國連太郎の下記のコメントを見てビックリ！

反戦の映画、というのは何作か出たことがあります  
が表層的なものが多かったんです。  
今作では相米さん独特の、縁の下にそれがありますね。  
見えないように見えないように、そして終わったらば  
子供たちを通して50年前がひるがえってくる、  
という大変深いものでした。

一体、本作のどこが反戦映画なの？誰でもそう思うはずだが、いやいや、さすが名優・三國連太郎の着眼点とその分析力は鋭い。本作後半からは、このコメントをしっかりと思い出しながらその展開をしっかり楽しみたい。

2025（令和7）年1月23日記